

遠隔授業「世界は今—サンフランシスコから」



室岡 義勝*

e-Learning : World Affairs Now – From San Francisco

Key Words : Long distance education, San Francisco Center, Special lecture

[世界は動いている。日本の、関西の、大阪の地方でのんびりしては確実に世界に取り残される。そこで、世界の経済・科学技術の最も動きの激しい、米国カリフォルニアのシリコンバレー、バイエリアで仕事をされている方々の留学や国際的な仕事の経験談を直接聞いて、世界の今を理解し、国際社会で暮らし、志を立ててチャレンジする精神と勉学のあり方を学ぶ。]

これがシラバスに書いた授業の目的とねらいである。この「生産と技術」の読者の多くは、10年以上も前に大学を卒業された方でしょうから、大学の授業というものは教授、助教授が講義したい内容の教科書がないという理屈をつけて、およそ体系化されていない興味本意の専門講義と思っておられる方も多いでしょう。最近では、大学の講義の評価もうるさく、全授業に対してその計画と教育目標と内容を明示したシラバスを冊子にしてあらかじめ学生に配ります。

本授業計画は、「米国のさまざまな分野で活躍中の日系トップの方を講師に招き、それぞれの分野で世界的視野で講義していただき、阪大サンフランシスコオフィスのスタジオから毎週ライブの遠隔授業（インターネット）により配信する。授業中に、テレビ会議システムを介して受講生と講師との質疑応答を行う」でありました。



*Yoshikatsu MUROOKA
1942年1月生
1967年大阪大学大学院工学研究科醸酵工学専攻修士
現在、大阪大学、サンフランシスコ教育研究センター、センター長、工学博士、バイオテクノロジー
TEL 1-415-296-8561
FAX 1-415-296-9676
E-mail : murooka-y@osaka-u-sf.org

幸いサンフランシスコ、シリコンバレー周辺は、日系人、日系企業、日本の官公庁出張所も多く、そうした方々のコミュニティーも発達していることから、大阪大学が海外拠点をサンフランシスコに設置したことを歓迎され（1）（写真1）

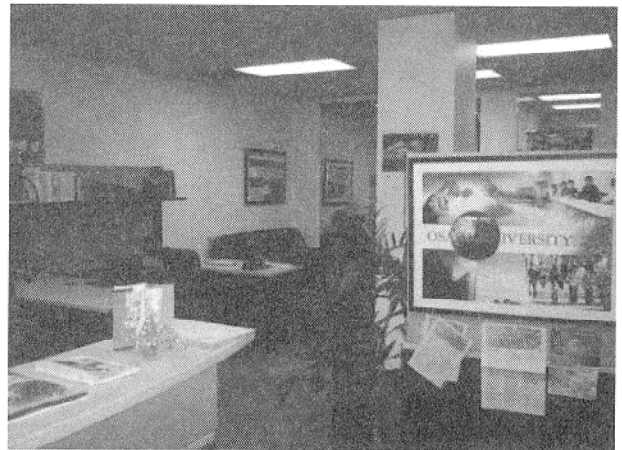


写真1 大阪大学サンフランシスコ教育研究センター

すぐにコミュニティーの仲間に入れてもらえました。このコミュニティーを通して知己となったサンフランシスコ総領事、日本貿易振興会事務所長、外資銀行重役、ベンチャー企業の社長、カリフォルニア州弁護士、学術振興会センター長、投資会社の社長といった方々をお願いして、2005年4月より遠隔授業を豊中キャンパス(旧教養部)の学生に配信を開始した。（写真2）

初めての遠隔講義でもあり、お忙しい著名人に講義をお願いしているという手前もあり、新入生向けに宣伝用ビラを配ってもらった効果もあって、受講人数50名目標のところ、170名も押しかけて、収容人数120名の講義室は立ち見が出た（写真3）。ゴールデンウィークが過ぎれば今までの経験から出席者は半減するという予想に反して、一向に減る様子

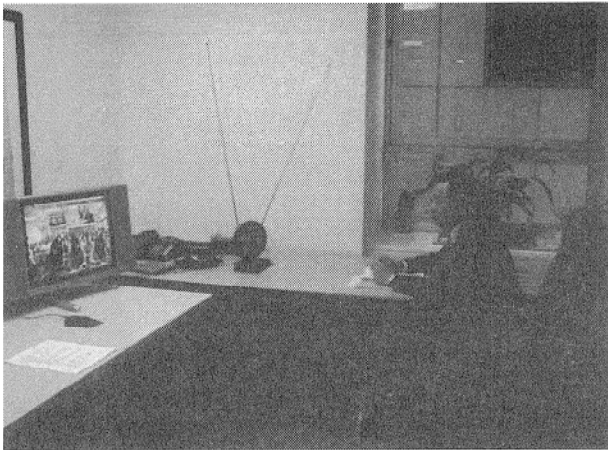


写真2 センター内スタジオから山中総領事の講義



写真3 豊中キャンパスでの受講風景

がないので、スクリーンのある隣の部屋まで使うことになった。最終的に授業登録したのは165名であった。常に新しいことに挑戦するのが大学であるはずだが、先例主義の事務局との整合性に苦勞する。例えば、海外事務所は遠隔授業などの「教育」をやってはいけない。従って、講師謝礼も事務所経費から支給出来ない。結局交渉の末、本年度より海外事務所を教育研究センターとした。

(www.osaka-u-sf.org)

さて、この受講人数に気をよくして、遠隔授業は大成功！と学内外に触れ回った自信は、最終回のアンケート調査で打ち砕かれた。ある学生曰く、「世界は今という講義タイトルにもかかわらず、私的な話が多く、世界視野の講義が少なかった」、「サンフランシスコ、シリコンバレーに固執しすぎていた」、「通信トラブルがあり不快になることが多かった」、などなど。確かに、こちらに住んでいると、米国の西海岸が世界の中心と錯覚し、新聞記事でもそうだが、日本は世界の1地方という感覚にとらわれる。講師の多くは、世界各国の駐在員を歴任された方だが、それでも新技術はシリコンバレーから生まれ、経済はシリコンバレーの浮沈に依存していると考えがちである。

時差の関係から、サンフランシスコは木曜日午後4時50分から、豊中は金曜日の1時限目の8時50分から始まる90分の講義であり、終了10分前には質問時間をとり最後にレポートなどの宿題を出した。それに対して、「そちらは夕方ではこちらは朝なのでテンションの違いがしんどかった」、「質問時間が短く、質問もしがたかった」、そして「眠ってしまうこと

も多かったが、いい刺激をもらった授業だった」など正直な意見があった。こちらの講師側の画面には豊中の授業風景が映る。前の方の席でずらりと居眠る受講生の風景が大写しになるので、講師に申し訳なく、「最近の学生は夜更かしが多く普通の授業でもこうです。」と弁解しきり。こちらの大学生は、授業中には眠らない。日本に来る留学生が一番戸惑うのは、日本の学生が授業中眠ることだという。会社の会議で眠る重役もいるとのことだから文化の違いだろうか。しかし、国際社会では許されない。7名の講師のうち5名は米国の大学または大学院を卒業されているので、米国の大学流に学生に質問をして眠らさない努力もされた。

一方、宿題のレポートを読んだ講師の反応はなかなか良かった。阪大生は大人だから、講師に対しては批判的なことは書かない。「学生の大半は、しっかりした意見を持っていて、阪大生は作文が非常に上手である」、という評価であった。米国に留学し、国際社会で苦勞してきた講師の方々は、自分の経験談を若い学生に伝えることを喜びとされていた。ある講師の奥さんなどは、日系人や米国人のパーティの席ごとに、「阪大は 'World Affairs Now- From San Francisco' という、素晴らしい講義を行っている」と宣伝しているのだと話されていた。この英語のタイトルもしゃれているようだ。

ところでこの評価アンケートは、30年近く勤めた中学の英語教師を辞めて、阪大の人間科学研究科の大学院に入学した、辻岡圭子女史の遠隔講義研究の一環として集められたものである(2)。その分析結果によれば、講義を受けて異文化を知ること

より、意識構造が自ら変わったと学生が述べていることから、多くの学習者が将来設計を含め、意識改革から専門のための語学などの学習意欲が増したと判断できる。留学に対する動機づけがある程度なされ、遠隔授業の目的は達成できたといえる。13回無欠席が52%、1回の欠席者が25%であり、この高い出席率は、異文化に対する興味の高いことを物語っている。各講師の講義に対する興味度は、5点満点の平均3.7であり最高4.4と普通の授業より高かった。今後の改良点として学生から、「著名人でなくても話の面白い人を採用すべきで、眠たい講義が多かった」、[経済系の話題が多すぎる]、そして「サンフランシスコで活躍している女性はいないのか」という指摘があった。そこで本年度は、新たに日系のマスコミを代表する女性社長および日本の漫画とアニメを全米に紹介して活躍中の社長にも講義をお願いした(表1)。こうした努力にもかかわらず、本年度は宣伝を行わなかったせいか、受講生は50名弱である。その分眠る学生は少ないが、遅れて入って来る女子学生が目立った。講義内容を詳しくお知らせする紙面はないが、この講義 (<http://www.cep.osaka-u.ac.jp/>) を一番楽しんでいるのは私自身かもしれない。

学部生に直接英語での講義は無理ではないかと考えて、日本語での講義をお願いしたのだが、「せつ

かくサンフランシスコでやっているのだから、現地のアメリカ人による講義も受けてみたかった」という声もあった。そこで本年度後期から、[世界のトップランキングされる米国の大学のキャンパス紹介と講義を英語で直接聞いて、米国の大学における講義を実体験するとともに、現在米国の大学に留学して勉学中の先輩からも、米国における授業や学問の魅力およびキャンパスライフの楽しみを学ぶ]ことを授業目標にたてて、「学問のすすめ—米国の大学キャンパスから」(Academic World-Insights from American Universities)という特別科目を大学教育実践センターにお願いした(表2)。米国全土から13大学の先生を講師に招いている。さて、英語の授業にどれだけついていけるか、何人の学生が聴講してくれるか、心配と楽しみが交差している。著名教授も多く、阪大の威信をかけてもこの遠隔講義を受ける学生は、居眠りすることは許されない。

参考文献

- (1) 室岡義勝 国立大学海外交流拠点事始—
まずはサンフランシスコから、生産と技術
第56巻第4号p.64-67 (2004)
- (2) 辻岡圭子 遠隔講義による国際理解教育、日
本教育工学会年次大会、2005年9月

| 授業回数 | 講師名、講義タイトル |
|---------|--|
| 第1回 | 在サンフランシスコ日本国総領事館・総領事 山中 誠 「学生諸君に語る」 |
| 第2,3回 | 日本貿易振興会サンフランシスコ事務所・所長 原岡 直幸 「ビジネスパートナーの選び方」 |
| 第4,5回 | バンク・オブ・ザ・ウエスト・取締役・顧問 松浦 功 「私の留学経験:ステーキとお寿司、国際金融情勢」 |
| 第6,7回 | バイオベンチャー企業 B-Bridge International, Inc. CEO&President 榎本博之 「新天地の醍醐味—ベンチャー企業を起こして」 |
| 第8,9回 | 日本およびカリフォルニア州弁護士 下田 範幸 「チャレンジのすすめ」 |
| 第10,11回 | 日本学術振興会サンフランシスコ研究連絡センター・所長 竹田 誠之 「ビッグサイエンスと国際協力—すべては霧から始まった」 |
| 第12,13回 | 米国投資会社 JAIC America, Inc. President & CEO 梅津Jack 泰久 「投資のすすめ」 |
| 第14回 | SFラジオ毎日・北米毎日新聞 社長 中川 淳子 「ラジオ放送と新聞—言葉の不思議」 |
| 第15回 | VIS Media LLC Founder/Co-Chairman 堀淵 清治 「萌えるアメリカマンガとアニメ」 |

表1 世界は今—サンフランシスコから (前期金曜日1時限)

| 授業回数 | 講師名、専門領域 | 大学キャンパス |
|------|---|---|
| 第1回 | Prof. Michio Tsutsui Technical Communication | The University of Washington |
| 第2回 | Prof. Syuji Nakamura Material Science | University of California, Santa Barbara |
| 第3回 | Director Peter Arzberger Life Science Initiatives | University of California, San Diego |
| 第4回 | Prof. Nicholas Sitar Civil and Environmental Engineering | University of California, Berkeley |
| 第5回 | Prof. Yoshio Nishi Electrical Engineering | Stanford University |
| 第6回 | Prof. Raymond L. Rodriguez Molecular and Cellular Biology | University of California, Davis |
| 第7回 | Assistant Prof. Akiko Iida-Klein Molecular Biology | Columbia University |
| 第8回 | Prof. Michael J. Sadowsky Biotechnology | University of Minnesota |
| 第9回 | Ms. Mariko Sasaki Medical Science | Cornel University |
| 第10回 | Dr. Richard H. Nader International Engineering Initiatives | Texas A & M university |
| 第11回 | Dr. Hajime Kobayashi Biology | Massachusetts institutes of Technology |
| 第12回 | 第12回 Prof. Hiroshi Fukurai Sociology | University of California, Santa Cruz |
| 第13回 | Prof. John Ino Dentistry | University of California, San Francisco |

表2 学問のすすめ－米国の大学キャンパスから（後期水曜日2時限）

